

【なぜ私がプロジェクト X なの？】

突然、投稿依頼がメール配信されてきた。読むと「私のプロジェクト X」を書けとのこと。ちょっと待てよ、今まで書いた方をあわてて探してみると、第 1 回 118 号大島紀房氏(前支部長)第 2 回 121 号山口甲氏(元北海道開発局長)と、それぞれの分野で業績を収めた人たちで、言ってみれば技術士会の「偉人伝」「人生訓」のようなものではないか。なぜ自分がピックアップされたのか、安直にイエスとは言えないと悩んだ。

そして一定の結論に達して、執筆を承諾することにした。すなわち、広報委員長を昨年まで仰せつかって、「辞めるからには何かを残せ」と佐藤厚子氏をはじめとする残った広報委員の方々から言われ続けていたことを思い出し、言ってみれば「卒業文集」のようなものと考えて、後に続く人が書きやすいようにコーヒープレイク的に私を挟んだと理解することとした。

だから、決して“プロジェクト X”ではなく、プロジェクト・バツ(X)のようなものなのだが、そのような感覚で読んで頂ければと思う。

ということで、僭越ながら稚拙な文章で「私のプロジェクト X」を投稿することとなった。この文章を読んで、「な～んだ、この程度なら俺でも書けるや」と思って後に続いてもらえたら幸甚である。

【なぜ土木屋に？】

私の小学生の頃はテレビなどはなく、毎晩、ラジオから流れる浪曲を父親と聴いていた。小学 6 年の時に東京オリンピックがあり、日本国中が高度経済成長期の真っただ中であつた。高校入学の 1968 年には GNP がアメリカに次いで世界第 2 位となり、「東洋の奇跡」と言われた時代であつた。当然、身近な場所でも建設の鈍音が鳴りやまず、土木とか建築がもてはやされた時代でもあつた。考えてみれば、流行りに流されて土木を選んだだけだったのか？

大学に入り、河川地形学の講義で「水の不思議」を教わつた。いろいろな物質に 3 態はあるが、我々の

生活に密着している水は、日本では 3 態を自然界で見られる幸せを感じてほしいという内容。すなわち、水の気体、液体、固体が自然状態で身近に見られる日本は素晴らしい環境を有しているのだと言われ、へ～そうなのかと思った。これが現在、水のコンサルタントに勤務する引き金だったかも知れない。

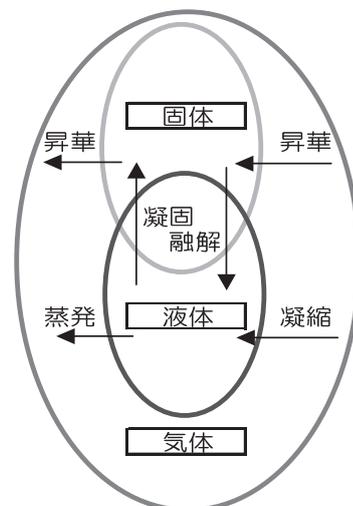


図-1 水の三態概念図



写真 本四架橋～明石大橋

また、高校生の時の旅行中に橋(東名高速・静岡県内だったと思う)を見たときに、青空をバックにして白い橋脚、赤い橋桁が富士山を背景に素晴らしい景観を呈していたことに感動し、地図に残る仕事(地球に彫刻)をしたい(現在、某大手建設会社のキャッチフレーズになっている)という思いを強くした。

土木技術者になるのなら土木作業員を経験しておくべきだと考え、アルバイトで日雇い労働者を経験した。おかげで大学入学は遅れたが、そこでは少しでも高い日当が貰えるよう、朝も明けないうちから職安の張り紙をわれ先に見るために並び、学卒の土木技術者(現場監督)が年配の作業員からどのように思われているかを感じ、作業を通して「土木」を実感した。

また、子供の頃に家の裏を流れる小川にスコップで土を盛ってダム(堰)を作り、高さ1mを超えて満足していたら、突然土砂に体ごと流されて、危うく一命を落とすところだった。今考えると、ただ土をひたすら盛っただけで、水を通しながらの“施工”だから崩壊は当然であるが、当時の子供心には、崩壊直前に見た堤体が膨れあがる現象に対して、水の恐ろしさを知ると同時に、今度はシートを被せて漏水を防いで壊れないダムを造りたいという目標が沸いた。(実際には家人にひどく怒られて、小川への立ち入り禁止措置が執られたため、実行はできなかった。)大学の卒論もダムの設計で、日夜七桁対数表を片手にタイガー計算機を回したのを覚えている。

大学卒業後ゼネコンに入社し、最初の現場もロックフィルダムの施工現場で、その意味では子供の頃の希望が叶ったと言えるだろう。

表 世界の主なロックフィルダム

ダム名	所在地	堤高(m)	竣工年	摘要
ヌレーネダム	タジキスタン	300.0	1980	堤高世界一
アスワンハイダム	エジプト	111.0	1970	総貯水量世界第3位
高瀬ダム	長野県	176.0	1979	堤高日本一
大雪ダム	北海道	86.5	1975	

「土木」という言葉は、英語では civil engineering (直訳すると市民工学)となる。日本では「土」と「木」すなわち「大地」を表す素晴らしい言葉だと思うが、一次は3K、最近は濁音が嫌われて学生が集まらないなどの理由により、大学の学科では社会基盤とか社会環境とか言われているのが残念である。ちなみに、CivilとはMilitaryの反意語で、アメリカでは前者は民間事業を主体とした工学を意味し、ダムなどの公共工事は軍事部門に通じるということで、アメリカ陸軍工兵隊(司令所)などが司っていた。

【私のプロジェクトX】っていったい何?

学生時代は暇を見つけてはアルバイトで貯めた僅かなお金をポケットに、バックパッカーで駅に寝泊まりしながら、全国放浪の旅を繰り返した。おかげ(?)で、宿泊していない県は西日本に数県ある程度になった。無計画な放浪で資金が底をつき、とある駅前のそば屋さんで見つけた「アルバイト募集」の張り紙に応募し、事情を察したご主人からお金を借りたこともあった。そんな人情も残っていた時代である。ただ、過ぎたために必修科目のコンクリート実験を落第し、実験助手に頼み込んで翌年何とか単位を頂いた苦い記憶もある。

「旅の目的は?」と聞かれると確固たるものはないが、強いて言えば旅することによって、現在の自分や日本を、外から見ることができ、視野が広がると考えたからではないだろうか。当時、平和運動家で「ベ平連」を結成した小田実氏の著書「何でも見てやろう」(1961)を読んで、感銘を受けたのがきっかけだったのかも知れない。今は歳を取ったので、「のんびり、ゆったり」が旅の基本となっている。



写真：フランジパニ(プルメリア)は南国を代表する花



写真：悲恋の物語が伝えられるオヒアレフア

また、旅先で知り合う土地の人との会話も楽しい。地方ごとの気候風土や植物を見たり、地元のものを食べ、人情、歴史感を肌で感じることができるのも、旅の醍醐味といえる。

今は南洋系の島々を毎年訪れて、非日常の「何もしない、何も無い、時計も時間もないところ」でリフレッシュしている。これは、日常の職務に忙殺されている人々にとって、かけがえのない時間となること請け合いである。

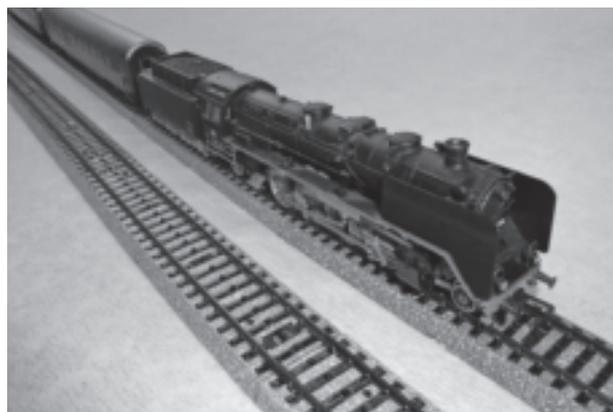


写真：旅先で植えたコーヒーの木を再訪

そんなことで、私には何も自慢できるものはないが、旅を通して身につけた処方で、「人の輪」を大切にしてきたことくらいだろうか。難題にぶつかったときに、「人の輪」ネットワークにどれほど助けられたことか。うれしいときも悲しいときも、人の輪があるからこそ、前に進めたような気がする。

また、私は「旅」をしていくうちに鉄道マニアの端くれとなり、以来、ドイツ製の鉄道模型に給料の多くを割いた時期が続いた。

月給6万円台のころ、ほぼ同額の機関車を購入し、



写真：清水から飛び降りて買った鉄道模型

その月の生活に困った記憶がある。現在も興味は持ち続けているが、奥さんの指導もあって投資額は激減した。

言ってみれば、全国行脚の旅が、私のプロジェクトXだったのかも知れない。もう終わった？ いやいや、何度訪れても「旅」には新しい発見があり、終わりはない！

【スピードと科学技術】

「世はまさにスピードの時代」とは、良く言い古された言葉である。移動時間の短縮もさることながら、日本の域を超えて世界各地のイベント情報も、リアルタイムで見ることができるようになった。

今年上海万博(5月～10月)があった。入場者数は今まで最高だった大阪万博(1970)を上回る勢いだという。大阪万博には私は高校の修学旅行で訪れ、アメリカ館やソ連(現：ロシア)館に展示された科学技術の高さに驚いたものだ。ただ、一番印象に残っているのは、チェコ館と一緒に写真を撮ったコンパニオンのお姉さんの綺麗だったことと、ソ連館

表-1 東京～大阪間の所要時間の変遷

年代	対象列車等	1 Hr	2 Hr	3 Hr	4 Hr	5 Hr	6 Hr	7 Hr	8 Hr	9 Hr	以上	所要時間
江戸時代	東海道五十三次	→										7～14日
M22	東海道本線全線開通	→										20時間
S5	特急「燕」	→										9時間
S33	特急「こだま」	→										6時間50分
S39	新幹線「ひかり」	→										3時間
H4	新幹線「のぞみ」	→										2時間30分
計画	中央リニア	→										67分

で食べたアイスクリームが経験したことのない甘さで、乳固形分12%（当時我が国では4%以下だったと思う）に驚いたことである。今ではカルチャーショックのようなものはなくなり、その意味でも情報は世界を駆けめぐり、地球は小さくなったと想う。

また、6月～8月には、サッカー・ワールドカップ（南アフリカ）があった。ほぼ地球の反対側にある国で開催している試合を、同時刻に茶の間のテレビで当たり前のように観戦できることこそ、科学技術のなせる技ではないだろうか。

科学技術と言えば、直径わずか300余mの小惑星イトカワから、小惑星探査機「はやぶさ」が打上げから7年の歳月を経て帰還した。このニュースは、科学技術立国を目指す我が国にとって、技術力の高さを世界に席卷できたうれしいニュースであった。とりわけ、「なぜ世界一を目指すのですか？2番目ではだめなのですか？」の名言(?)で話題になった事業仕分けで、科学技術関連予算が大幅に削られた中、国民に勇気と感動を与え、「あきらめない」の象徴としてのはやぶさ人気に押されて予算復活の動きも出てきたことは、世論が科学技術に目を向けた結果であり、理科離れの一助になればと期待している。

ちなみに、小惑星イトカワにはクレーターや平原に名前が付けられているが、その一つが「上砂川」と命名されている。これは、微小重力実験施設があったことに由来するが、残念ながら現在は閉鎖されてしまったことは、慚愧に耐えない。

私も中学時代に糸川英夫博士の著書に触発されて、当時売り出し始めたシャープペンシルを機体に

見立て、ペンシルキャップを逆さにつけてノズルにし、理科実験室から様々な薬品を失敬して（もう時効であろう）液体燃料によるロケット作りに励んだ。ロケット実験は見事に失敗し、単に爆弾ができただったが、その痕跡は自室の天井に大きな焼け跡を残すこととなった。

なお、1955年に打ち上げられた糸川博士のペンシルロケットは固体燃料で、液体燃料はまだ作られていなかった。なんと無謀なことを考えたのかと今になって反省している。

今では多くの衛星が地球を周回していて、肉眼でも夜空に衛星を捕らえることができる時代になった。

話は変わるが、世界中で開催されるイベントや政治経済などのニュースを見ていると、「日本に生まれて良かった」といえる国を作らなければならないと改めて感じさせられる。このことは、物質だけでなく精神的にも言えることである。

いろいろな国に行くと、決して物質的には恵まれていなくても、精神的な満足を得ている人々に接することがある。

新幹線インフラ競争をフランス、ドイツなどと競っている。我が国の経済戦略として重要ではあるが、旅の早さを追求することだけが科学ではない。

最低限の生活レベルや学力は必要だけれども、ブータンの国民総幸福量（GNH）や国民幸福指数（GHP）は、物質や所得に支配的であった概念を国民の感性に支配的な指標として注目を集めていて、我が国や中国、韓国などでも検討が始まっている。

自分にあった時間の流れを作り、生活リズムを見つけること、それが幸せになる秘訣ではないか。

「日本に生まれて良かった」といえる国、すなわち物質的にも精神的にも満たされて、社会的評価偏重ではなく、安心・安全に暮らせる国を作らなければならないと思う。

【将来の夢】

最近の調査で「将来の夢」を聞くと「あり」という答えが60%をはじめて下回った。現代の若者は高収入より安定志向、出世欲よりマイホーム主義、集団主義より個人主義、汚れ仕事よりカッコイイ仕事な



写真：世界に誇るスバル天文台（標高4205 m）



写真：雑踏が始まる前の東京の静かな朝焼け



写真：地元民がのんびり過ごす小さなビーチ

んだそうだ。

時間の進む早さは大都会になるほど早い気がする。新宿や有楽町の混雑した歩道を歩いていると、乱雑に見えても実に制御されたスピード感で他人とぶつかることもなく縦横無尽に人が行き交っている。

そんな中で立ち止まり、人をよけながら歩いているのは、きっともう少し「時間のスピード」の遅い地域に暮らす人々ではないだろうか。

私は、もうすでに「将来の夢」を語るような年齢ではなくなってしまったが、最近流行の言葉で言う「終活」を考えると、生き馬の目を抜くよりはもっとゆっくりと歩き、スローフード・スローライフのように、時間に追われない生活にあこがれている。



写真：夕日を背にビーチサイドで夕食

ある国を訪れたとき、決して上品とも綺麗とも言えないオープンエアーのとある田舎町の食堂に入った。空気はねしっと(妻の造語で蒸しっととねっりの合成語)していて、店には誰もいない。裸電球が揺られて猫一匹が足下に寄り添ってくるだけ。席につい

ても注文も取ってくれない。奥に人の気配がしたので声をかけると、いかにも気怠そうに注文を取ってくれた。彼(彼女)達は今では日本ではほとんど見かけなくなったブラウン管テレビの前に集まり、地元のバラエティー番組のようなものを見ていて、楽しみの時間を邪魔されたかのような雰囲気であったが、その屈託のない笑顔と笑い声の中に、私たちと比較するととても裕福とは言えない生活の中に、私たちより「幸福」を感じているのではないかと思った。



写真：ヴィラでくつろぐ筆者

私は、そんな時間の使い方をしてみたい。海外移住はできないけれど、ロングステイをしてみたい。温かい南風に吹かれて時計のない時を送りたい。妻が踊るフラにあわせて私がウクレレを弾くのもいい。

今私はジョージ・クルーニー主演の映画「マイレージ・マイライフ」(2009)のように、マイルを貯めては特典航空券に替えて旅する日々を送っている。もっとも、私の場合はもっぱら陸マイル(飛行機に乗らないで買い物などをカード決済で貯める)

が多い。これもわが人生！

こうして考えてみると、過去を振り返って子供の頃の私のプロジェクトXは、ダム造り、ロケット作りなど、ことごとく失敗に終わったけれども、これからどんな生き方ができるのか、私の夢の実現に向けて努力することこそ、「私のプロジェクトX」なのかもしれない。

最後に、古い友人から来た手紙を紹介(抜粋、ほぼ原文)して、人間は生まれる国を選べないが、宗教にも民族にも人種にも大きな偏見を持っていない平和な国・日本に生まれたことを感謝し、「この国に生まれて良かった」と想いつつペンを置く。

TO : All my friend

あの惨事が起きたとき、貿易センタービル 50 階のフロアで仕事をしていました。

4 日目の朝を迎えました。

昨夜は雷雨で今も空はどんよりして雨が降っています。雷の音で体が震え、ヘリコプターが空を飛ぶ音でおびえています。

New Yorker からは笑顔が消えました。

あちこちでろうそくの灯がともっています。

恐怖より今は怒りの気持ちで一杯です。

私たちが階段で 50 階から避難しているとき、26 階くらいから消防士があがってきました。励ましてくれました。“君たちは出口に向かってる。大丈夫！ 5 World Trade Center のビルの方に逃げろ、もう出口はすぐだ。”

心強かった。それでも階段をなかなか下りることができない。

ときどき上階から火傷をしたけが人が降りてくる。背中がやけどでめくれ上がっていたり、顔も髪も焼けていたりしていた。

“Stay on right” の声が飛び交う。下まで次々に伝えられている。怪我人を先におろしてあげようという皆の声。

消防士の人たちは重い装備をして、階段を上がっていくのに息も絶え絶え。汗が額から流れていた。私の前で息を整えている一人に水のボトルを差し出したら、“Thank you” の言葉も出来ず、笑顔でボトルを受け取ってくれた。

Name plate には“Peter” とあった。その水は他の消防

士が自動販売機を壊して、避難して水を求めていた人たちに配ってくれたもの。

あの消防士の人達は全て瓦礫の下に今居ると思うと、いたたまれない。励ましてくれて笑顔で応えてくれた人たちだった。

それでもビルの中にいる頃には何が起こったのか判らなかつたので、それほど恐怖はなかつた。階段の電気もついてたし。ロビーが近づくと、壁がめくれビルの損傷がひどいものだと思つた。

大変なことだと気づいた。ロビーはスプリンクラーで水浸し。その辺のものが焼け焦げていた。水の中を走って外に出て、上を見上げたら、悲鳴を上げてしまった。信じられない光景だった。まさに、地獄だった。

たまたまそばにいた日本人女性と抱き合つて逃げた。お互いに震えていた。

ビルから 100 m ほど走つたところで、背中を激しく押されて、地面にたたきつけられた。

目を開けることも出来ず、暗闇だけだった。

多くの犠牲者の中に、あの消防士達がいる。

あの勇気と優しい笑顔を持つ人たちには愛する家族が居て友人が居る。

私が出来るとは何だろうと考えている。

犠牲者全員の一人一人の魂に話しかけたい気持ちで一杯だ。

これからのことは何も考えられない。仕事ももうここでは探せないだろう。

でも、生きている！

今回のことは一生忘れないだろうが、心の痛手は少しづつ時間が解決してくれると確信している。それは多くの人の労り、励まし、暖かさを感じているから。

ありがとう。

Sep.14 .2001

大熊 正 信 (おおくま まさのぶ)
技術士(建設/総合技術監理部門)

経歴

- 1952 年 札幌市生まれ
- 1977 年 千葉工業大学土木工学科卒業
- 1977 年 伊藤組土建(株)入社
- 1979 年 (株)福田水文センター入社
- 2006 年 同上 取締役(技術担当)
- 2003～09 年 日本技術士会北海道支部広報委員長
- 2007 年 日本技術士会北海道支部幹事

